

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省料増徴を覚悟し紙面を二割縮  
明治三十一年十月十日第三種郵便物認可(毎日、隔一日発行)  
平成十八年七月一日発行(第百九十九号)発行

# ホトトギス

七月号



## 俳句随想 〔二百八十九〕

汀子

ホトトギス同人坂井建さんが若くて亡くなったのが今尚昨日のこのように思えるのにはや三年半を超える歳月が経った。大蔵省という要職の中の転勤で広島、愛知、東京と勤められ、その地の部下たちに俳句の種を蒔かれ、俳句作家たちを養成されて来た。理想やビジョンを掲げて努力してきた建さんを私はどれだけ期待してきたことであろうか。神様は時に残酷なほど人々に試練をお与えになる。若い命にも病魔が突然襲い建さんは帰らぬ人となつてしまった。

一緒に勉強していた仲間、指導を受けていた後輩達は一瞬にして路頭に放り出された。

自分たちでお互いに切磋琢磨してこの道を進んで行きますと手紙を頂いたKさんは毎月ホトトギスに投句して来られる。仲間たちが結束して俳句を勉強しておられることに私はずっとエールを送り続けて来た。

Kさんから送られてきた通信欄に次のような便りがあった。「税務訴訟を担当し、作成する文書には徹底的に法的根拠と論理性を求められます。俳句には美わしき自然を自分の言葉で記し、かつ省略で余韻を生じさせられます。いずれも苦悩の連続ですが、対極にあるからこそ救われている感じがしています」建さんは間違いない皆の心に生きている。

# 旬日記 汀子

平成十七年七月一日 芦屋ホトギス会

すぐ決まる話 扇の風の中日帰りの上京一回 梅雨の旅

七月三日 関西野分会

ふと会話 蹟くときの扇かな 白合咲いて山家の暮し 淋しめず 通されし広間に百合の所在 問ふ

七月三日 下萌旬会

この空のどこかに紅の立つべかり

七月四日 ロイヤル俳壇

潮風に耐ふる 籬の花 海桐 山荘の夏炬を焚けば 人集ふ 降らぬまま 博へのことなき 梅雨の旅 緑なす 大地に未来あることを

七月八日 工業倶楽部

貸し借りといふも 扇の風のこと 汗の顔にも 意気込みのあることを 汗すぐに 引き 浜風の残りけり

七月九日 東北ホトギス俳句大会前日旬会

みちのくの梅雨の旅を憂しとせず みちのくの涼しさを恋ふ 旅心 零しても 梅雨の旅てふ証ほど

七月十日 東北ホトギス俳句大会

山寺に 蟬 聞てば 待ちある汗の 帰路 みちのくを 発てば 待ちある汗の 帰路

七月十二日 大阪倶楽部

蟬鳴いて 雨止んで ぬしこと 告ぐる 高原の旅の 待たるる 月見草 雷の 佈さを 知つて 有る故に みちのくの 涼しさに 旅終へしこと

山荘の 月見草には 回顧あり

雨止んで 涼しき 旅となりしこと

七月十二日 綿業倶楽部

待たるるは 旅路をつづる 合歡の花 合歡咲いて 有る 高原の旅を 恋ふ 毛虫まで つけ来し 菜とは 知らず 茹で

七月十四日 清交社

とび立ちて 天道虫の名の 失せし 夕顔の 萎え 天めし 朝旅立ちぬ 梅雨明の 待たるる 旅の 近づきぬ

七月十四日 祝佐々木静子さん五十周年

先達として の 涼しき 五十年 七月十六日 石見ホトギス俳句大会前日旬会

夕影の 沼辺に あれば 露涼し

諸鳥の 急を 告げたる は た、がみ 三瓶野に 虹の 条件と どのひて 露涼し 三瓶の 草を 踏み分けて

七月十七日 石見ホトギス俳句大会

よべ 聞きし 鶴はいづこか 露涼し 夏草や 闇の 恐怖を ひそませて

七月十九日 有恒倶楽部

五六歩で 引返しても 登山かな 百合咲きて 花の 重さの 生れけり 梅雨明といふ 約束の やうなもの

七月十九日 無名会

雲の 峰崩れんと して 夕べ来る 滝音の 消え 瀨音となる と ころ 地の ほとりより 立ち上る 雲の 峰

七月二十日 夏潮旬会

朝の 雨上りたち まち 雲の 峰 星を 見しよべの 変幻 梅雨 明くる どうしても 浮かねば ならぬ 浮人形

七月二十三日 北海道ホトギス同人会

葛 饅頭名 付けられし も 想 ばるる 蝉 鳴いて ぬますと 席に 着 かけけり 暑さうな 表情 見せず 席に 着く 誰 彼に 逢へば 涼しき 回顧あり

人々に 涼しき 出逢ひ 有る 旅路 七月十三日 北海道ホトギス俳句大会前日旬会

蝦夷の 夏とは この 広さ この 大地 万緑に 印す 一歩しこと わが 旅路

七月十四日 北海道ホトギス俳句大会

この 浜に 立ちし 虚子 あり 蝦夷の 夏 白老の 夏潮 荒きと ころかな

七月二十五日 アサヒカルチャー

今日も 又 旅の 延長 汗 涼し 北国の 涼しさ すぐ に 忘れけり

七月二十六日 春菜会

あまつさ 又 雷の 予報の 有る 宿り 古都の 雨台風の 端と ときをり 迷路めく 奈良の 古町 夏の 雨

七月二十七日 春菜会

夏帽子 雨にもかぶり 出て 行かれ 皆 齢を 涼しく 加へ ゆきに けり

七月二十八日 きららぎ会

皆 出掛け ゆきて 涼しく 残さるる 暑きこと 風雨 過ぎたる より 覚悟 会場の 涼しく 灯る シャンデリア

七月三十一日 時雨会

加齢とは 応へる 暑さ ありに けり 賢 沢な 涼しき 時間 共有す 金魚玉 部屋に 存在 生れ けり

七月三十一日 野分会

富士 見えて 降下は じまる 旅 涼し やり 残したる 仕事 持ち 旅 涼し 牧童の 来て 次々と 牛 洗ふ

七月三十一日 野分会

ペランダの 改装 少し 秋 近し 都内にも 残る 牛舎や 牛 冷す 食欲の さそふ あらひ でありに けり 奈良 扇 又一つ 増え 旅の 土産 贈られて 大地に 降ろす 百合の 鉢 白合の 香に 慣れといふもの なかり けり

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成十七年七月三、四日 はつびい吟行会

沙羅の花ほほゑみながら落ちにけり  
遠景といふ木天蓼の白さかな  
万緑に尾根の明暗ありにけり  
こんな日にアイスクリーム食べますか  
時鳥武尊彩るものとして  
青芝を蹴つてリフトの人となる  
夏霧に突つこんでゆくリフトかな  
梅天に五十四個の視線かな  
万緑を育む天の涙とも  
ハプニング二日続いて会涼し  
万緑の山迷ひたる人抱き  
山気込め鶯老を鳴きにけり  
郭公も鴉も山の音楽家  
迷ひたることを涼しく語らるる  
五月雨に鳥語応へてをりにけり

七月六日 一水会

網戸てふ境界ありて君と僕  
撫林夏帽吸はれゆく迅さ

七月七日 蕉心会

冷房といふ道草でありにけり

日盛のエンジン音でありにけり  
涼風を纏ふ歩幅でありにけり  
天気予報信じ梅雨傘携へて  
涼しさを極めアロハの貴人たり  
早よ来いやビールの泡が消えんうち  
筏曳く船の涼しく上りゆく

七月十一日 朝日カルチャー若草句会

大夕立都心を白く彩れり  
大夕立新宿副都心縮む

七月十四日 土筆会

向日葵の疲れ切つたる夕かな  
波といふ海月の自由ありにけり  
梅雨明を待ちてワインを開けもして

七月十五日 浜田吟行句会

山陽と山陰繋ぎはたたがみ  
商港と漁港涼しく隔てられ  
姥百合に城の盛衰聞かまほし  
拍手の音 蝸を鎮めたる

七月十六、十七日 石見ホトギス俳句大会

蝸の四部合唱といふ距離に  
梅雨霧も息づくものとして三瓶  
鳴くものの一つ一つに耳涼し  
夏山といふ大自然交響曲  
鳥語聴く日傘十五度傾けて  
草原に黒日傘てふ句読点

七月十九日 草木瓜会

邂逅やこの炎天を来ればなほ  
炎天の去りゆく山の深さかな  
炎天下働くは人のみにあらず  
トマト切る包丁研ぐは夫の役  
炎天や北半球といふ運命

七月二十一日 登高会

髪洗ふ三瓶の風に触れながら  
羅や昭和一桁てふ気品  
テリーヌは我的手作り夏料理  
夏料理てふ彩りも味のうち

七月二十六日 若水会

人寄せて月下美人の宵となる  
夏瘦をしても巨漢でありにけり

七月二十七日 目黒学園句会

病葉も一景として親子句碑  
病葉に空の透けゆく一とところ  
子等の顔寄せてメロンの切られけり  
病葉に森の吐息を整へり  
野菜室といふメロンの玉座かな

七月二十九日 時雨会

冷し牛びしびしと尾の喜べり  
秋を待つとはこの風にこの地震に  
太郎より花子が先や牛洗ふ  
丹沢に汲んであらひの水となる  
秋近き地震の都心でありにけり



## 雑詠句評（六月号より）

純也・一步・仁義

暮潮・比奈夫・小木茂

雅・弘子・基子

昭代・廣太郎

### 君一步吾一步春深みかな 鹿見島 青野沙人

一読 虚子の「彼一語我一語秋深みかも」の名句を思い出す。この句は、内容的には虚子の句とは、全く異なつてはいるが、表現としてはひじょうに似通っている。もちろん、廣太郎先生は、虚子の句の存在をご承知の上で、この句をお取り上げになつてゐるのである。と、すると、パロディーとしての面白さということであらうか。

「春風の日本に源氏物語」「秋風の日本に平家物語」という、一対のような句がある。が、これはどちらも同じ京極杞陽の句である。同じ作者ならば、こういう句の存在価値もあると思うのだが、類句・類想という問題が、騒がれる昨今、こういう句は、読者はどう捉えられるだろうか。（純也）

言うまでもなく、どなたもあの虚子の名句を思い出された事だろう。もちろん作者も十分承知の上だろうが、敢えてこの表現を選ばれた、というよりは授かつたのである。春が深まつたある日の情景を見事に自身の作品として生み出されたのである。又、草田男の「降る雪や」の名句と比べるとは大げさだろうか。（廣太郎）

### 大試験父は寡黙に見送りぬ 龍ヶ崎 今橋真理子

此の句の構成からみて大試験とは、その人の一生を決めるかもしれないような大学の入学試験あたりのことと推察される。大試験を受けにゆく当日の朝のこと、母親はなにか忘れ物はないかなど本人の傍についていてなにかにと子に注意したり励ましている。そして父親はというと「落ち着いて受けて来いよ」ぐらいの一言だが心にしみる声を掛けてくれて珍しくも玄関まで見送つてくれたのである。最近では大試験という語はあまり使われないようであるが、此の季題の響きに寡黙という語が正にびたりと当て嵌るのである。私自身の大学受験の日の遠いむかしの父の姿を思い出している。（一步）

実は筆者も同じ経験を最近したのだが、最近の受験は、母親の方が熱心になつている事が多いようだ。もちろん父親も、無関心というわけではなく、母親と同じように心配しているのだが、なかなか口に出してそれを言うのも照れくさいだろう。現代の受験事情を言い当てた句。（廣太郎）

天地有情

子選

春雨に滲む春日の山の色 榎原 稲岡 長  
 ならやまの伴寺隠す樹の芽立 同  
 鳴滝の大根甘しと思ひけり 神戸 後藤比奈夫  
 独り居に大年あつてなき如し 同  
 俳磚を眺めつ日向ぼこりかな 東京 稲畑廣太郎  
 里山といふ屈心地に年酒酌む 同  
 虚子館の祝のもてなし暖かし 長岡 安原 葉  
 日溜りに穴を出し蛇動かざる 同  
 生涯の大団円や去年今年 豊中 瀧 青佳  
 暗雲の渦巻き走る冬の晴 同  
 さゞ波も立て、揖保川春立つか たつの 浅井青陽子  
 寝ねたりし思ひにひたり春の風邪 同  
 なにもかも途上にありて青き踏む 熊本 岩岡中正  
 雑踏といふ春寒もありにけり 同  
 うかれ猫後姿の豹変す 東京 坊城俊樹  
 玻璃の夜のしづかや春炬しづかなる 同  
 どの景も日のゆるびゐて春めける 吹田 宮崎 正  
 源流は鷹ヶ峰とや水温む 同

しろがねの淡きことづて春の雪 大阪 佐土井智津子  
 息白く集ひしことも神さびて 同  
 凧に負けてはならぬ老の気宇 福山 竹下陶子  
 凧や日輪雲に歪みたる 同  
 百三十二歳の虚子に梅ふふむ 神戸 山田弘子  
 六年の歳月しかと梅椿 同  
 うつつへと雪の仙郷より還る 同 長山あや  
 木のやうに閑かに寒さうけて立つ 同  
 青き踏む声の並んでゆきにけり 大阪 塙 告冬  
 太陽を森に塗り込め風光る 同  
 此の世へは袴を佩きて土筆出づ 同 薦 三郎  
 母と子の友も母と子あたたかし 同  
 一輪のとどむ宙あり濃紅梅 八尾 岩垣子鹿  
 ことごとく海光を溜め梅匂ふ 同  
 バスも来し人出に梅の咲き遅れ 熱海 嶋田一步  
 白梅に紅梅目立ちはじめけり 同  
 山門を見通す梅の白さかな 東京 今井千鶴子  
 九歳やヴァレンタインの日の秘密 同

# 天地有情句評

汀子

虚子館の祝のもてなし暖かし 長岡 安原 葉

虚子記念文学館設立六周年を祝う心を受けて。

暗雲の渦巻き走る冬の晴 豊中 瀧 青佳

荒々しい冬の晴れていく過程を語る作者。

寝ねたりし思ひにひたり春の風邪 たつの 浅井青陽子

よく眠れた満足感が癒してくれる春の風邪。

雑踏といふ春寒もありにけり 熊本 岩岡中正

人込みの中の孤独を春寒に托して。

うかれ猫後姿の豹変す 東京 坊城俊樹

後ろ姿に恋猫の凄まじさを見ている作者。

ならやまの伴寺隠す樹の芽立 榎原 稲岡 長

朱雀門も復元。伴寺の存在を語る。

独り居に大年あつてなき如し 神戸 後藤比奈夫

孤独をかみしめる大年。

里山といふ居心地に年酒酌む 東京 稲畑廣太郎

新年を迎える場所の雰囲気想像される句。